発表 No.実９　　実践発表

教科と日本語の統合学習における支援の工夫
—JSL 国語科１年生「うみのかくれんぼ」の授業実践を通して—

田中 奈季　（　福岡市立東箱崎小学校　）

１．はじめに

本校の日本語指導教室では、１年生から６年生まで１２名の児童が学習している。本実践の対象である１年生児童３名は、学習内容や日本語の力に応じて、個別で日本語基礎の学習をしたり、グループで教科と日本語の統合学習を行なったりしている。本実践では、教科との統合学習として JSL 国語科の学習（光村図書１年「うみのかくれんぼ」）を行った。本実践は、JSL 児童が説明的な文章を読む際に、「問い」に対する答えを自分で見つけられるようになることや、記述内容を具体的にイメージできるようにすることをねらいとした。また、日本語教室での学習を生かして在籍学級の授業に参加できるようにすることを目標とした。

２．実践の内容

2.1. 対象児童

対象児童は日本語学習歴や母語が異なる１年生の児童３名である（表１）。日本語の力は異なるが、複数指導を行なうことで在籍学級により近い学習形態を体験させることができると考え、グループでの学習を設定した。

表１　児童の実態

	A児（１年生）	B児（１年生）	C児（１年生）
滞在歴／学習歴	7年5か月／6か月	4年6か月／6か月 （保育園に4年間通園）	7年1か月／3週間 （保育園に6年間通園）
本時で予想される困難さ	在籍学級での国語科の学習経験が少ない。 文章の中に、知らない語彙や文型がたくさん出てくるため、文章の内容を理解することが難しい。	ひらがなを読んだり書いたりするのに時間がかかるため、教科書の文章を読みとったり自分の考えを書いたりすることが難しい。	言葉のまとまりとしてひらがなをとらえることが難しいこと、語彙が少ないことから、教科書の文章の中から重要な語句を見つけることが難しい。

2.2. 授業の実際

2.2.1. 単元計画

在籍学級との並行指導で、全８時間の単元のうち、３時間を日本語教室で、５時間を在籍学級で学習した。日本語教室で「はまぐり」の事例を学習することで、それを生かして在籍学級での「たこ」や「もくずしょい」の事例の学習に参加できることをねらい、表２のような単元計画を立てた。

表２　単元計画

次	時数	学習内容	在籍学級との関係
第1次	1	・既習の説明文の学習を想起し、「問い」「答え」がある文章を読むことを確かめる ・「～が～にかくれています」の表現や海の生き物の名前を知る	取り出し
	2	・「うみのかくれんぼ」を読み、学習課題を捉え、学習計画を立てる	在籍学級
第2次	3	・「はまぐり」の事例を読み、何がどのように隠れているかをまとめる 【本時】	取り出し
	4	・「たこ」の事例を読み、何がどのように隠れているかをまとめる	在籍学級
	5	・「もくずしょい」の事例を読み、何がどのように隠れているかをまとめる	在籍学級
第3次	6	・「かくれんぼクイズ」の作り方を知り、問題と答えの文を作る練習をする	取り出し
	7	・自分の調べた生き物について「かくれんぼクイズ」を作る	在籍学級
	8	・友だちと「かくれんぼクイズ」をし、感想を伝え合う	在籍学級

2.2.2. 本時の目標と支援

本時の目標は、表３に示す通りである。また、主な学習活動と支援の内容を表４に示す。

表３　本時の目標

JSL国語科の目標	○「はまぐり」の事例を読み、「何が」「どこに」「どのように」隠れているのか、文章中から見つけることができる。 ○「はまぐり」の事例を読み、初めて知ったことを伝えることができる。
日本語の目標	○ 写真を見たり動作化したりすることで、「すな」「（はまぐりの）あし」「のばす」「もぐる」の意味を知り、「はまぐり」の隠れている場所や隠れ方を理解することができる。 ○「なにが」「どこに」「どうやって」の質問に答えることができる。 ○「～がわかりました」を使い、文章を読んで分かったことや初めて知ったことを話すことができる。
ターゲットセンテンス	・ なにが かくれていますか。 ・ どこに かくれますか。 ・ どうやって かくれますか。

2.3. 実践結果

児童は、意欲的に本単元の学習に取り組んでいた。どの児童も、砂の上で「はまぐり」の模型を操作しながら、隠れ方について自分の考えを発表することができた。また、その動きを言語化したことで、「はまぐり」の体の特徴や隠れ方を理解し、ワークシートに言葉を書くことができた。

表４　本時の展開と主な支援

主な学習活動	支援
1.ウォーミングアップ	○ 海の生き物フラッシュカード【記憶支援（反復する）】
2.本時学習のめあてをつかむ （1）前時までの学習を振り返る （2）本時学習のめあてをつかむ	○「～が～にかくれています」【表現支援（モデルを示す）】
3.「はまぐり」が隠れる場所を読み取る （1）「どのように」の意味に気づく （2）「はまぐり」が隠れる場所を考える （3）「はまぐり」が隠れる場所を文章から読み取る	○「どこに」「どうやって」短冊【理解支援（言い換える）】 ○ 模型の操作【表現支援（表現方法を示す）】 ○ 板書の短冊と教科書に引く線の色を対応【理解支援（視覚化する）】
4.「はまぐり」の隠れ方を読み取る （1）「はまぐり」の隠れ方を考える （2）「はまぐり」の隠れ方を文章から読み取る （3）動画を見て、「はまぐり」の隠れ方を確かめる	○ 模型の操作【表現支援（表現方法を示す）】 ○ やりとり【表現支援（対話で引き出す）】 ○ 板書の短冊と教科書に引く線の色を対応【理解支援（視覚化する）】 ○ デジタル教科書の動画【記憶支援（視覚化する）】
5.読み取ったことをまとめる （1）「おたずね」の文の答えをワークシートに書く （2）書いたことを発表する	
6.「はまぐり」について分かったことを発表する	○「～がわかりました」【表現支援（モデルを示す）】
7.本時学習を振り返る	

日本語教室で学習したことを生かし、在籍学級での学習でも板書を見ながらワークシートを書くなど、学習に参加することができた。

３．考察

写真や実物を提示したり、模型を操作しながら動作を言語化したりしたことは、言葉の意味を理解したり自分の考えを表現したりするのに有効だった。日本語教室で説明文の学習の仕方を指導し、在籍学級の学習に参加するという単元構成は自律的な学習を促すのに効果的だった。また、在籍学級での学習形態に近い授業を経験させるという点や、自分の考えを相手に伝えようとするために日本語での表現の仕方を知ろうとする点において、日本語教室での複数指導は有効だった。

一方で、複数指導の場合、それぞれの児童の実態に応じた読みや書きに対する個別の支援を十分に行うには難しい面がある。複数指導の良さを生かしながら個別の支援を充実させていく必要がある。また、日本語教室で学習したことを在籍学級での学習につなぐためには、使用する教具や支援の方法を統一する等、在籍学級との連携が必須であると思われる。

４．おわりに

本実践の対象児童は、本実践だけで学び方を定着させたり語彙を増やしたりすることは難しかった。しかし、日本語教室で本実践と同じようなパターンでの学習を繰り返し、在籍学級で学習を重ねることで、少しずつ自律的な学習ができるようになってきた。現在では、在籍学級での学習に意欲的に参加する姿も見ることができるようになった。今後も在籍学級と連携しながらJSL児童にとって有効な支援の方法を考えていきたい。

付記

本実践の遂行にあたり、福岡市立千早小学校 西村綾子 校長先生にご指導を賜りました。また、福岡市JSL日本語指導教育研究会では、多くの先生方にご指導いただきました。深くお礼申し上げます。

【参考文献】

齋藤ひろみ・池上摩希子・近田由紀子（2015）『外国人児童生徒の学びを創る授業実践』くろしお出版
臼井智美（2014）『学級担任のための外国人児童生徒サポートマニュアル』明治図書
光村図書（2021）『こくご一下　ともだち』